

〔表紙写真解説〕

国木田独歩は明治二十六年（一八九三）の九月三十日、二十一歳（満年齢）の時、徳富蘇峰の紹介、矢野龍溪の推せん、鶴谷学館（旧藩主開設）の英語と数学の教師として赴任した。

独歩は佐伯に赴任して、いったん旅館に落ちついたが間もなく当時鶴谷学館の監事、学館の責任者であった山際の坂本永年の厚意で、同家の二階に寄寓していた（表紙写真）。『春の鳥』の主人公六蔵は、この坂本の甥で、幼時父を失い、母と姉とともに坂本家に世話になっていた山中泰雄という少年であった。小説にある六蔵の悲惨な死は、独歩の創作である。

独歩は坂本永年家に九か月ほど過ごし、明治二十七年八月一日、鶴谷学館を辞任し、生徒四人と弟をつれて上京している。

坂本邸はもとと女島沖の洲にあつた毛利家のお浜御殿で、明治になって坂本家が買いうけ、移築したものだといふ。その際玄関の上に二階をとつたといふ。同邸は佐伯市の貴重な文化財である。

引用資料は『佐伯市史』・『豊後の国佐伯』・『佐伯』（佐伯市商工観光課・平成九年）・「市報さいき」（歴史散歩・平成四年十月一日号）等を使用。写真は商工観光課の提供による。同課の坪根哲あきさんにはお世話になりました。紙上を借りてお礼申し上げます。（矢野）

陸地峠からじ

直川村の大字仁田原と宮崎県東臼杵郡北川町との境にある峠。標高五二〇尺。この峠路は、古くから佐伯と延岡を結ぶ交通路であり、明治十年（一八七七）の西南の役の古戦場としても有名。

昭和四十二年（一九六七）に直川・佐伯の両史談会が西南の役の戦没者の最初の供養祭を催し、昭和五十一年にも西南の役一〇〇年を記念、現地で供養祭が開かれた。また、直川史談会は昭和六十年（一九八五）には、峠に「西南之役陸地峠戦闘跡」の記念碑を建立した。

頂上からは、祖母山・傾山・尺間山などが展望できる。現在、この峠は林道陸地直川線が通り、小型の自動車が通れる。（直川村誌）